

法政大学第3回FDシンポジウム
「学生・職員・教員によるFD改善とは」参加によせて

2010年1月12日

図書館事務部市ヶ谷事務課 円谷香奈

私は昨年4月より法政大学に入職し、図書館業務に携わっている。FDに関して直接関わりのある業務ではないが、現在本学が、そして他大学がどのような取り組みに力を入れているのかを知るために、今回当シンポジウムに参加した。

第一部における立命館大学木野先生による基調講演は、「学生とともに作る授業、学生とともに進めるFD」がテーマであった。教職員だけのFDでは、授業や教育を受ける学生の視点が見えないという考えのもと、学生を主体とした授業改善活動、学生同士の教育改善活動を行っている。こういった取り組みは、立命館大学のFD活動の定義にも反映されている。具体的には、学生の主体的な参画を進めるために、150人という大規模授業においてディベートを取り入れる、コースツールを用いて学生同士が活発な意見交換を行う、といった活動を行っており、そこには教員、学生、職員が相互に協力する仕組みが作り上げられている。また、立命館大学の学生FDの最大の特徴は、学生スタッフがボランティアにより成り立っているという点だろう。大学の授業や教育に対して、受け身の姿勢から主体的能動的な姿勢に転換することは学生自身の成長につながるというメリットがある一方、大学を変えるためにミーティングをし、企画を考案・実行することは容易なことではない。しかし、こういった学生の主体的な行動が教員・職員を動かす原動力となることは間違いない。本学においても、これに倣い、「授業を変えたい」「教育を変えたい」という強い思いを持ち、自ら行動に移すことのできる学生が集まることを大いに期待したい。

次に、岡山大学橋本先生による基調講演では、「学生参画型教育改善」をテーマとし、学生発案授業の事例が紹介された。中でも、橋本先生が実際に担当されている“大学授業改善論”という授業が非常に興味深かった。大学教育の現状と課題をグループ討論などで学習した後、自分たちが共通して受けた授業の改善提案を皆の前で発表し、過半数の賛同が得られたものは、その担当教員に直談判に行くという内容である。橋本先生ご自身も過激な内容とおっしゃっていたが、こういった授業が成り立つ背景には岡山大学の特徴である学生参画型教育改善の定着が存在する。学ぶ者の視点を授業改善に積極的に取り入れようという大学の理念のもと、学生が生き生きと活動する様子が伝わってきた。橋本先生が“学生としての3つの意識”のうちの1つとして挙げられた「学びの主権者としての意識、つまり教育は受けるものではなく一緒に創り出すもの」という考え方が学生だけではなく、教員、職員にまで共有化されていることこそが、岡山大学並びに立命館大学に共通するFD活動を活性化させている要因だと感じた。また、立命館大学の学生FDの特徴として、ボランティアにより成立している点を挙げたが、一方、岡山大学の学生FDの特徴として

は、11 学部から推薦された学生委員により委員会が構成されている点が挙げられるだろう。推薦方法は敢えて各学部に一任しているということだが、それではやる気のない学生も多くいるのではと考えてしまう。しかし、やる気のある学生たちばかりでは真の学生集団とは言えないという橋本先生のお話を伺い、やる気のない学生の視点を汲みこむこともまた、大学をよりより教育の場として変革するために必要なことだろうと納得した。

第二部では、本学の FD 活動への取り組みに関して、教員・学生・職員それぞれの視点からの発表が行われた。スポーツ健康学部における授業見学ウィークやクリッカーの試験的導入、社会学部における実験授業やシャガク・カフェなど、初めて耳にすることばかりで、いかに自分が周りに目を向けていなかったのかということを感じた。同時に、職員という立場にある者として、学生の意見を把握できるような近い存在になることと、学生のニーズを教員に伝え具体策を積極的に提案していくという役割を職員が担っていくことの重要性を感じた。本学並びに他大学の FD への取り組みに関して、実際に活動されている方々の生のお話を伺うことにより、沢山の有益な知識を得ることができたのはもちろんのこと、なによりも FD の取り組みを身近な存在として感じることもできたこと、自分自身の日々の取り組みにおいても本学の教育をよりよいものへと変化させることができると考えたことが一番の収穫であった。今後もこのようなセミナー、シンポジウムに主体的に参加し、常に大学全体の先進的な取り組みに目を向けていきたい。